

Title	瞬間と永遠 ジル・ドゥルーズの時間論
Author(s)	檜垣, 立哉
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59392">https://hdl.handle.net/11094/59392</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【36】

氏 名	樋 垣 立 哉
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 8 6 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 8 月 17 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 名	瞬 間 と 永 遠 ジル・ドゥルーズの時間論
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 上 野 修 (副査) 教 授 須 藤 訓 任 立 命 館 大 学 先 端 綜 合 学 術 研 究 科 教 授 小 泉 義 之

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は二〇世紀後半のフランス哲学に重要な位置を占めるジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze 1925

ー1995)の思想をその前期から後期の全体にわたって「時間論」の視角から読み解き、これを形而上学的な自然哲学として哲学史の中に位置づける研究である。序章と五つの本章と終章、さらに補論をなす二つの論考からなり、単著『瞬間と永遠 ジル・ドゥルーズの時間論』(岩波書店、2010年、全197頁)として刊行されている。

序章はドゥルーズの時間論を現代の分析哲学や現象学の時間論と対比しながら、永遠性と瞬間性が同居する自然哲学的時間論としてこれを特徴付け、いまでは傍流となった十九世紀の思考までを含めた思想史的パースペクティブの更新を示唆する。

第一章は主著『差異と反復』の「第三の時間」論を取り上げる。現在を中心とした「生ける」時間でも、記憶の実在を巡る「過去の実在」の時間でもないが、しかしそれらを含むような、未来時間の位相(第三の時間)を解明し、これを無根拠の時間、現在のな経験に介入する非経験的な無限直線の俯瞰として説明する。

第二章は「第三の時間」論の精神分析的な方向性を検討し、さらに、続く著作『意味の論理学』におけるその発展を跡づける。その発展は、アイオーン(永遠)とクロノス(時間系列的な現在の時間)の対比で語られる時間論に見出される。さらに身体と言語を主題とした動的発生に関する議論が時間論にもたらす変更を検討する。

第三章は後期の主著『シネマ』を中心に、とりわけその第二巻に出てくる「時間イメージ」について時間論の観点から分析し、『差異と反復』では「イメージなき思考」として示されていた領域が、視覚芸術論におけるパラドクシカルなイメージ化として具体的に提示されていることを明らかにする。

第四章はフェリックス・ガタリとの共著である『アンチ・オイディプス』、『千のプラトール』、『哲学とは何か』など、後期の諸著作における時間論の転変をたどる。これまでの時間と生という主題を越えて、時間の議論そのものを人類史的、自然史的な歴史性の議論へと結びつけていくところにその特徴が見出される。哲学史的な時間や資本主義的な時間の主題化は、ドゥルーズの言う時間の無根拠性の介入のひとつのモデルと解釈される。

第五章および終章は、こうした歴史的思考に展開されるドゥルーズの時間性の議論と、二〇世紀的な諸議論、とりわけベンヤミン、フーコー、レヴィ=ストロースの自然史的な歴史概念との関連について論じる。それらは「断片」「分散」「破断」「地層的無意識」という仕方で歴史を捉える点で、形而上学的な非経験性の時間というドゥルーズの時間概念と重なる論点が少なくないことを指摘する。非経験の時間が経験に介入するときには断片的なあり方をとらざるをえない。このことが現代的な経験の諸相において次第に鮮明になってきているなか、ドゥルーズ時間論の解明が現代的な意義を持つことが示唆される。

補論1は、こうした時間論を可能にしたドゥルーズの思考の方法をパラドクシカルな方法として特徴付ける。この方法はベルクソンの時間と持続というテーマを空間論的な拡大によって乗り越えることで形成されていると論じる。

補論2は、前期から後期にかけていくつかの時期的な転回を辿るドゥルーズの議論を腑分けし、その転回の意義について明らかにする。とりわけ時間論との関連においては、前期の著作において顕著であった、「第三の時間」の非経験性と、それ自身によって生じるパラドクシカル性という方法論が、後期の著作においては希薄になっていくことを示し、この方法論の変化がドゥルーズの思考そのものに対して持つ意義を明らかにする。

本論文はドゥルーズに関する我が国で最初の本格的な哲学的モノグラフとして位置づけられる。七つの章と二つの補論からなる考察は、前期から後期にかけてのドゥルーズの主要著作のすべてを視野に置きつつ、時間論を軸にとることで、ドゥルーズの思考を純粹に哲学的な視点から骨太に論じること成功している。具体的には、前期の著作『差異と反復』で提示される「第三の時間」を「視点なき俯瞰としての時間系列」と捉え、それが時間経験とパラドクシカルな関係を持つことによって、いわば経験されない仕方で生きられる「非経験の時間」として介入してくる機制を明らかにし、さらに『意味の論理学』のアイオーン(永遠)の議論のうちにこの「第三の時間」論の発展を跡づけながら、非経験の時間の介入を瞬間としての永遠として解釈する。そしてこのような瞬間としての永遠が形而上学的な抽象性にとどまるものではなく、後期の『シネマ』では視覚芸術における「時間のイメージ」として、またガタリとの共著『アンチ・オイディプス』や『千のプラトール』では視点なき俯瞰としての「経験不可能な自然」の時間として展開される次第を明らかにしている。ドゥルーズの著作を貫くテーマを追う本論の姿勢は一貫しており、時間の形而上学に対するドゥルーズの哲学的寄与を取り出してみせたことは高く評価される。

とはいえ議論の中には十分に明晰化されていない点もいくつか残る。『差異と反復』の問題の中心は瞬間としての永遠そのものよりはむしろ、構造的な齟齬が強い「未来の反復」である。『意味の論理学』においても、アイオーンという永遠回帰の時間は未来へ向けた出来事そのつどの反復として論じられている。本論文で「非経験の時間」と特徴づけられる永遠がそうした未来の反復の経験とどう関係するのかは明確となっているとは言えない。また「非経験の時間」が、想像力のある種の限界を超えた行使によって経験のなかでどう「ドラマ化」されるのか、十分議論が尽くされていない。空虚な時間として当初提示されたはずの「無限的な俯瞰性」が「自然的な時間の持つ歴史性」と解され、「語る主体による人為的な時間」との交錯において論じられるとき、はたしてそうした歴史性という概念が「未来の反復」を尽くしているのか疑問が残るところである。要するにドゥルーズが直線として特徴づける永遠回帰の構造、そして本論が「パラドクシカル」と名づけるまさに反復を強いるところの齟齬の構造、これが十分明確化されていないうらみがある。

しかしながら、ドゥルーズの哲学をたんなるポストモダン的思考としてではなく、哲学史のなかに位置づけられるべき形而上学的な自然哲学として捉え、これを哲学的な業績として読み解こうとする本論の意義は高く評価できる。よって本論文を博士(文学)にふさわしいものと認定する。